

2024年度第2回町田市自殺対策推進委員会 会議録要約

1 日時 2024年11月11日（月） 14時00分～15時40分

2 場所 市庁舎2階2-3会議室

3 出席者

一般社団法人町田市医師会 宮地委員長、秋法律事務所 秋山委員、北里大学医学部精神科学 稲田委員、特定非営利活動法人全国自死遺族総合支援センター 秋田委員、特定非営利活動法人東京多摩いのちの電話 早借委員、八王子労働基準監督署町田支署 鈴鹿委員、町田公共職業安定所 涌井委員、警視庁町田警察署 關委員、町田消防署 渡邊委員、公益社団法人東京都町田市歯科医師会 山崎委員、一般社団法人町田市薬剤師会 安岡委員、社会福祉法人町田市社会福祉協議会 神田委員、町田商工会議所 青木委員、町田市町内会自治会連合会 中委員、町田市公立小学校長会 山中委員、町田市公立中学校長会 工藤委員

4 資料

【資料1】2024年度町田市の自殺対策の取組状況等について

【資料2】2024年度保健所運営協議会開催概要について

【資料3】2024年度関連団体の自殺対策の取組状況について

【参考資料1】2024年度町田市自殺対策推進委員会委員名簿

【参考資料2】町田市保健所運営協議会について

【参考資料3】市販薬の濫用防止に関するポスター（厚生労働省作成）

【参考資料4】2024年度関連団体取組：まちだ健康づくり推進プラン24-31進捗状況確認シート

【参考資料5】2024年度関係各課取組：まちだ健康づくり推進プラン24-31進捗状況確認シート

5 議事要約

（1）開会

委員長の挨拶の後、開会された。

（2）報告事項

事務局から資料1・2に基づき、「2024年度町田市の自殺対策の取組状況について」及び「2024年度町田市保健所運営協議会の開催概要について」、報告を行った。

（質疑・意見）

委員：ゲートキーパーの啓発ポスターのサイズは何種類あるのか

事務局：縦B1サイズ、横B3サイズ、縦A4サイズとなっている。このほかにもA4サイズのクリアファイルも作成している。

委員：資料１の総合相談会について、１人の相談時間は決まっているのか。
事務局：基本的に１カテゴリー３０分とさせていただいている。次は３月の開催。
委員：２０２４年３月の総合相談会はどこで開催したか。
事務局：市庁舎３階３－２、３－３会議室にて開催した。
委員：相談件数が減っているのが気になる。
事務局：複数相談される方が減ったため、相談の件数全体も減ってしまった。
委員：相談項目は予約の際に決めるのか。
事務局：予約の際に決めていただいている。予約方法については電話で受け付けている。
委員長：総合相談会を利用された方からご意見等はあったか。
事務局：参加者から集計したアンケートでは好意的な意見が多かった。
委員：法律の相談についてはある程度話が進んだ後は専門家へつなげているのか。
事務局：基本的につなげている。総合相談会自体がその場で悩みを解決するというよりもその後専門の相談窓口につなげることを目的にしている。

（３）情報交換

① ２０２４年度関連団体の自殺対策の取組状況について

各委員から資料３に基づき、自殺対策の取組状況について報告があった。

（質疑・意見）

委員：町田市社会福祉協議会では、市に委託を受けて、福祉〇ごとサポートセンターを開設している。２０２５年度に作成する相談先一覧に記載をお願いしたい。
委員長：労働基準監督署及び商工会議所が実施しているストレスチェックについて、経営者の方の理解が深まればもっと効果的に運用されると思うが、どうか。
委員：そう思います。現場で働いている方の気持ちをストレスチェックでくみ上げることができればよいと思う。
委員長：東京多摩いのちの電話では、相談員の養成をしているとのことだが、応募状況はどのような状況か。
委員：年度によって応募状況は変化する。２０人以上応募がある年もあるが、去年は５人のみの応募となった。その年に発生した災害や経済情勢に関係よって変化する。近年の傾向としていえることは相談員の年齢層が高くなっていることが挙げられる。
委員長：相談員の応募もそうだが、いのちの電話自体の利用状況についても社会情勢によって変化するのか。
委員：ここ１０年の変化の傾向として大きいのは、精神疾患の方が自立支援法に基づいて居住した地域での対人関係上の孤立や社会的な自身の価値をつかめないことによる悩みの相談が相対的に増えている。

②オーバードーズについて

次第のとおりオーバードーズに関して、以下のとおり意見交換を行った。

委員：保健所運営協議会の話があったと思うが、ここ最近は薬の入手が容易なことから 10 代のオーバードーズの件数が多くを占めている。10 年前までは 10 代の薬物乱用におけるオーバードーズの割合は高くなかったが、近年は非常に高くなっている。過去一年に市販薬の乱用をした経験がある高校生は 60 人に 1 人いると言われており、主に使用される薬としては風邪薬、咳止め、抗アレルギー薬、眠気防止薬、カフェイン製剤などネットで簡単に手に入るものが多い。このように市販薬の乱用が広まった背景としては、やはり SNS の普及と関係している。SNS 上で、「今日は〇〇錠飲んでハイになった」「たくさん飲んでこんなふうになれる」など情報が出まわり、そのマネをすることによりどんどん広まっている。覚せい剤と違って、違法性がないため問題意識が低いということも特徴である。オーバードーズをする理由だが自殺や死にたいという理由も多いが、それ以上に「ひどい精神状態から解放されたい」など生きづらさ、社会的孤立を抱えている人が多いと言われている。薬剤師会の対応としては、市販薬を購入する児童、生徒への声掛けを行うといったゲートキーパーとしての役割を担う、市販薬の販売個数制限、学校での薬物乱用防止教室の開催、処方箋の偽造や多重受診者情報の共有など進めている。しかしそれだけでは対処は難しく、この会議で関係各所皆様の意見を参考にし今後の活動に生かしていきたいと考えている。

委員長：市販薬によるオーバードーズの基本的な現状について説明があった。なにか他にご意見はあるか。

委員：OTC 医薬品について販売する際には薬剤師の立ち合いが非常に重要と考える。ドラッグストアでは風邪薬などを特に説明なしに販売している場面を時折見かける。そういった状況は問題だと感じる。

委員長：SNS の広がりや地域の対策がうまく追いついていない部分があるように感じる。

委員：救急の現場でも薬の空き箱などが落ちていることがあり、そういった場合は薬を飲んだか不明な場合であってもひとまず病院へ搬送する対応をとっている。先ほども話があったように薬の販売自体を規制していくのが有効だとは思いますが、ほんとに薬が必要な人が入手できないというのは問題だと感じるため、難しいと感じる。

委員：オーバードーズの 110 番通報がかなり多いが、精神疾患を抱えている方が多く、処方されている薬を飲んでしまう。そのため最低限の処方であれば、死に至る確率は減るとも考えられる。オーバードーズの場合は警察というよりまずは救急に連絡していただくことも重要。

委員長：学校の現状について、どのような状況か聞きたい。

委員：生徒への啓発のために薬物乱用防止教室は毎年実施している。今年度は薬剤師会ではなく、日本薬物対策協会にご協力いただいた。中学校年代でも手に入る医薬品の紹介やそれらの医薬品を多量摂取することによって体に悪影響が出ることに

てご講義いただいた。

委員：中学校と同様に薬物乱用防止教室を実施している。これまでの講義は覚せい剤などを中心的に取り扱ったものが多かったが、最近は市販薬の乱用について取り扱ったものに変わりつつあると感じている。

委員長：自殺対策に専門的に関わっている方々のオーバードーズへの対応についてもお聞きしたい。

委員：指導の中では、市販薬の服薬をしている若年層の方の電話はよくあるが、オーバードーズそのものの相談というよりもそのバックヤード（原因）について相談のお電話があることが多い。

委員：過量服薬でお亡くなりなるまでの人は少ない印象がある。

委員：近年の薬物乱用は、薬物そのものというよりも、孤立というものが問題と考えている。従来は薬物という物質の特性による依存性が問題視されていたが、最近は薬物に依存する人の状況などが要因にあると考える。薬物乱用依存教室等についても従来は、覚せい剤などが取り上げられていたものが変化してきており、SOS の出し方などの教育に移行してきている。市販薬については、インターネットでの購入が可能となってきたことが問題であり、店舗の薬剤師が対策を講じてネット通販サイトで購入できてしまうことに加えて、ネット通販サイトを規制するということは難しい。本質は孤立に問題があるのだとすれば、そこに対しての対応。病院に連れてこられた場合は身体的な問題がなくともそこから精神科へつなげ、解決に向けていくというのは非常に大切であると考えている。

委員：小中学生に対しては薬物に対する危険性について自分自身で判断できる意識を教育していくことが重要。

（４）閉会

会長から、閉会が宣言された。